

1. はじめに

古ロシア語 (10~15 世紀)¹の現在能動分詞の単数主格は、現在語幹の末尾の子音が口蓋化している場合、-*ǎ* (-*ǎ*)と綴る語尾のみをもつ (e.g. *глаголю* /glagol'ǎ/ 「語りつつ」、以下では口蓋化語幹と呼称する)。しかし、語幹末の子音が口蓋化していない場合 (以下では非口蓋化語幹と呼称する) には、古教会スラヴ語と同じ形で、印欧祖語の*-*onts* に由来するとされる -*ы* (-*y* [i]、e.g. *реку* /reky/ 「曰く」)、由来不明の -*а* (-*a*、e.g. *река* /reka/ 「曰く」)、そして口蓋化語幹の語尾と同一の -*ǎ* (-*ǎ*、e.g. *река* /rek'ǎ/ 「曰く」) という三種類の語尾が併存することが知られている。²この状況は 12 世紀頃まで存続したが、Ivanov (1983: 361) が述べているように、13 世紀以降には -*ǎ* が優勢となり、最終的に -*y* と -*a* は用いられなくなる。³

これらの語尾を比較言語学的にどう解釈するのかという問題をめぐって、これまでに多くの議論がなされてきた。とりわけ、このうちの -*a* の由来については、口蓋化語幹の動詞の -*ǎ* という語尾から拡張された古ロシア語内部の革新であるという類推説と、この -*a* が印欧祖語*-*onts* に由来する語尾であり、-*y* は他のスラヴ語からの借用であるという印欧祖語説の二つの立場が存在し、意見の一致をみしていない。

本発表では、この -*a* という語尾の由来が何であるのか、そしてなぜこの三語尾の併存する状況が生じたのか、という問題を考察する。そして、類推説の方が妥当性が高いということを示唆する。さらに、類推説を前提とした場合には、三種類の分詞語尾の併存に至るまでの過程で、通常の類推と異分析による類推の双方が起こっているということを示す。

2. 三語尾併存の状況

古ロシア語の現在分詞では -*y*、-*a*、-*ǎ* という三種類の語尾が併存しているが、それぞれの語尾はどのように用いられているのであろうか。本研究では、それを明らかにするために、-*ǎ* が優勢となる以前の時期である 12 世紀以前の古ロシア語文献約 36 万語を対象として⁴、それぞれの語尾が、どのような動詞語根と結びついて、どれだけの用例数をもっているのかということを調査した。

非口蓋化語幹の動詞語根のうち、12 世紀以前の文献に現在分詞の用例が存在するものは、(e)s-「ある」をはじめ 16 個が存在し、用例数の合計は 188 例であった。用例が存在した動詞語根と、そのそれぞれ

¹ インド・ヨーロッパ語族スラヴ語派東スラヴ語に属する一言語。現代東スラブ諸語の祖先と指定される。主要な文献としては『ルスカヤ・ブラヴダ (ルーシ法典)』(11 世紀頃)、『原初年代記』(12 世紀頃)、『イーゴリ軍記』(1200 年頃)などが挙げられる。

² 以下では、特に注記のない場合にはローマ字に転写した表記を用いる。

³ さらに、これらの語尾の末尾に -*i* を付した定形活用 (定性を付与する屈折現象) も存在する (e.g. *ид-у-и* 「行きつつ」)。ただし、-*у-и* というものに関しては過去分詞の定形活用と同形である。また、本発表で対象とした 12 世紀以前のテキストにおいては、語尾 -*a* に対応する定形活用*-*ai* の用例は確認できなかった。さらに、Durnovo (1969: 124) は -*mšy* という語尾も存在すると記述しているが、この語尾も 12 世紀以前の文献では確認できなかった。

⁴ 本研究では Lixačev (1997–2015) の 1 巻から 4 巻までのテキストを分析の対象とした。

に対し-y、-a、-jaのどの語尾がどれだけ付与されているのかというデータを表1に示す。

表1：12世紀以前の現在能動分詞単数主格語尾（語幹末が非口蓋化子音の場合）の用例数

現在語幹	-y	-a	-ja	各語幹の用例数の合計
(e)s-「ある」 ⁵	50	0	0	50
dad-「与える」	2	1	1	4
ěd-/jad-「食べる」	8	1	0	9
im-「もつ」 ⁶	13	0	0	13
id-「行く」 ⁷	4	1	1	6
mog-「できる」	13	0	0	13
nes-「運ぶ」	1	0	0	1
pek-「燃やす」	2	1	0	3
rek-/rk-「言う」	26	16	5	47
krad-「盗む」 ⁸	1	0	0	1
ved-「導く」 ⁹	5	0	0	5
věd-「知る」 ¹⁰	28	0	0	28
voz'm-「とる」	0	1	1	2
zov-「呼ぶ」	2	0	0	2
živ-「生きる」	0	0	2	2
žd-「待つ」	1	0	1	2
各語尾の用例数の合計	156	21	11	188
各語尾の用いられる比率	82.98%	11.17%	5.85%	

このデータからは、次のような事実が読み取れる。まず第一に、非口蓋化語幹の動詞の三種類の能動分詞語尾のうちでは、-yが最も用いられる頻度が高く、156例と全体の八割以上を占める。次に、-aおよびjaはrek-/rk-「言う」に付与される用例が大多数を占め、rek-/rk-以外の動詞に付与される用例は-aが5例、jaが6例と非常に少ない。そして、多くの用例が存在する(e)s-「ある」が-yのみをとる一方で、-aのみをとる動詞は存在しない。次節ではこれらの事実を踏まえたうえで、印欧祖語説と類推説の比較を行う。

3. 先行研究

3.1. 類推説

先行研究における古ロシア語現在分詞の起源についての見解は、類推説と印欧祖語説の二種類に大別される。本節では、現在に至るまでの先行研究を概観する。

類推説は、古ロシア語の非口蓋化語幹の動詞の本来の分詞語尾は-yであり、jaは口蓋化語幹の動詞か

⁵ この動詞は原則としてes-という語幹に基づいた現在活用を行う(e.g. *es-m'*「私は～である」)。しかしながら、現在三人称複数形(i.e. *s-ut'*「それらは～である」)および現在分詞(e.g. *s-y*「～でありつつ」)では、s-という語幹が現れる。

⁶ 接頭辞na-が付加された1例(*naimyi*)と、接頭辞pri-が付加された1例(*priimyi*)を含む。

⁷ 接頭辞iz-が付加された1例(*izydi*)を含む。

⁸ この語根の用例は接頭辞u-が付加された1例のみである(*ukradyi*)。

⁹ 接頭辞pri-が付加された2例(*privedy*と*privedyi*が1例ずつ)を含む。

¹⁰ 接頭辞sb/so-が付加された3例(*sovědyi*が1例、*svědyi*が2例)を含む。

ら拡張された語尾であるという見解である。そして、先行研究においては、何らかの要因によってその -ja という語尾から -j が脱落したものが -a であると主張されている。

この類推説をとった最初の研究は Miklosich (1876: 95) である。Miklosich は、古ロシア語文献では口蓋化語幹の動詞の語尾に由来する -ja が非口蓋化語幹の動詞の語尾として用いられていることを指摘したうえで、その -ja のかわりに -a が現れる事例が存在すると付け加えている。すなわち、Miklosich は直接的に起源について言及したわけではないが、 -ja から -a が派生していると述べているため、何らかの類推が起こったことを前提としていると考えられる。

この Miklosich の記述を支持した研究に、Jagić (1893: 521) および Gebauer (1909: 81–83) がある。Gebauer は、まず、対応する口蓋化子音の存在しない /k/ のような子音音素の直後に -ja が付与された場合には、 -j が脱落して、 ka のようになるという連声の存在を示唆した。すなわち、類推で生まれた -ja という語尾が語幹末に k をもつ語に付与されることで、 $\text{/kja/} \rightarrow \text{ka}$ という連声が起こり、表層形に -a という語尾の形が生じたということになる (e.g. $\text{/rekja/} \rightarrow \text{reka}$)。そのうえで Gebauer は、この表層形の -a が全ての子音音素の直後にまで類推によって拡張されたのが、 -a という語尾の由来であると述べている。この Gebauer (1909: 81–83) の記述が類推説の説明方法の根幹をなしている。

さらに、Gebauer (1909: 81–83) の説を支持した研究として、Kudrjavskij (1912: 392–397) が挙げられる。Kudrjavskij は、『原初年代記』ラヴレンチー写本と『ノヴゴロド第一年代記』のデータを用いて、口蓋化語幹の動詞と非口蓋化語幹の動詞がどのような割合で現れるかということを検証した。その結果として、口蓋化語幹の (すなわち、語尾 -ja をとる) 動詞の割合が 84%、非口蓋化語幹の (すなわち、語尾 -y をとる) 動詞の割合が 14% であるということを示した。このことによって、類推説を前提にした場合には使用頻度が高い語尾が類推によって拡張されたことになるということを示唆し、類推説に動機づけをした。Kiparsky (1967: 240–242) はこの Kudrjavskij (1912: 392–397) の記述に依拠して、類推説を支持している。

また、起源については言及していないものの、 -y が規範的な語尾であるという類推説に準ずる立場をとっている研究に、Avanesov and Ivanov (1982: 285–294)、Buslaev (1959: 106–108)、Gorškova and Kuznecov (1963: 292, 318)、Černyx (2011: 278–282) がある。

3.2. 印欧祖語説

印欧祖語説を最初に提唱したのは Zubatý (1893: 503–505) である。Zubatý は、まず印欧祖語の分詞語尾には $\text{*}\text{-}\text{ōn}$ と $\text{*}\text{-}\text{ō}$ という二つの語尾が併存していたということを主張した。そして、前者の $\text{*}\text{-}\text{ōn}$ が -y 、後者の $\text{*}\text{-}\text{ō}$ が -a に変化したと述べた。すなわち、複数の分詞語尾の併存は印欧祖語の時点ですでに存在しており、古ロシア語における三語尾の併存は印欧祖語の状況が受け継がれたものであると主張している。

Zubatý 以降に印欧祖語説を支持した研究には、Sobolevskij (1895: 91–93) および van Wijk (1924: 283–285) が存在する。Sobolevskij と van Wijk は、この -a が共通スラヴ語時代から存在するものだと主張した。Sobolevskij はその起源について明言を避けているが、van Wijk は、この -a は共通スラヴ語の北方言において、 $\text{*}\text{-y} > \text{*}\text{-a}$ という母音の変化が起きた結果生まれた変種であると示唆している。

また、起源には言及していないものの、 -a が規範的な語尾であるという印欧祖語説に準ずる立場をとっている研究として、Durnovo (1924: 255–256)、Kuznecov (1953: 201)、Matthews (1960: 110–111)、Ivanov

(1983: 361–363)、Gorškova and Xaburgaev (1997: 371–381)、Galinskaja (2014: 400–401) が挙げられる。

3.3. 両説の比較

印欧祖語説の利点は、三語尾の併存に至るまでの過程を規則的な音法則によって説明しようとするため、Gebauer (1909: 81–83) のように連声や類推に基づいた複雑な説明を行う必要がなく、説明の経済性に優れる点である。しかしながら、Zubaty (1893: 503–505) の説明方法にも van Wijk (1924: 283–285) の説明方法にも、言語系統上の問題が存在する。

Zubaty (1893: 503–505) の仮説は、印欧祖語の段階ですでに複数の分詞語尾が併存していたというものであった。しかしながら、そのような分詞語尾の併存は他のインド・ヨーロッパ語族の言語にはみられない。さらに、*-ō という語尾を印欧祖語に再建するという仮説についても、他の言語においてこの*-ō に遡ることのできる分詞語尾が存在しない。したがって、この仮説は同系統の諸言語からの比較言語学的な根拠に乏しいものである。

また、van Wijk の提起した、共通スラヴ語の北方言で*-y > *-a という変化が起こったとする仮説にも、問題点が存在する。それは、分詞以外の*-y という語尾には、この変化が起こっていないということである。例えば、共通スラヴ語における男性名詞の複数対格*-y は、古ロシア語においても-y の形で現れる (e.g. 共通スラヴ語*gordy > 古ロシア語 gorody 「街々を」)。したがって、*-y > *-a という音変化が起こったと考えることは困難である。

他方で類推説は、-y が古ロシア語本来の語尾だという見解であるため、-y が多数を占める理由の説明が容易であるという利点をもつ。

しかしながら、Gebauer (1909: 81–83) が示唆した/kʲa/ → ka という連声には反例が存在する。まず第一に、本研究の対象である非口蓋化語幹の現在分詞自体に-kʲa という形をもつものが存在する (e.g. rekʲa 「曰く」)。さらに、古ロシア語の語彙には他にも、Egʷipt 「エジプト」のような軟口蓋子音の直後に-ʲが現れる語が存在する。したがって、類推説においては、-a がどのようにして生まれたのかという類推の過程の説明の妥当性に疑問の余地があるといえる。

以上の事実から、現時点では印欧祖語説と類推説のどちらにも問題点が存在するといえる。印欧祖語説の問題点は系統の諸言語の証拠に乏しいことであり、類推説の問題は類推の過程についての仮説に反例が存在するという点である。しかしながら、両説の問題点の性質を比較すると、同系統の言語からの根拠を得ることが困難な印欧祖語説よりも、説明方法次第で改善の余地が存在する類推説の方が、発展の余地が存在するように思われる。そこで、次節では、類推説の説明方法を検討し、新しい類推モデルの構築を試みる。

4. 類推説の再検討

Gebauer (1909: 81–83) をはじめとする類推説の類推モデルは、口蓋化語幹の動詞の分詞語尾が-ja であるということを前提としていた。これは-A (-ja) という文字の綴り上の境界と同じ位置に形態素境界が存在すると解釈したものである。

しかし、-A (-ja) と綴る語尾を本来とるのは、口蓋化語幹の動詞である。したがって、Kuznecov (1953: 201) の記述のように、-a の直前の-ʲは語幹に属するものだと解釈するべきである。例えば、глагола

(glagol^la)「語りつつ」という動詞は、一見すると、キリル文字の綴り通りに глагол- (glagol-) が語幹で、л (-^la) が語尾であるかのように思われる。しかしながら、語幹は glagol^l-、語尾は-a と分析されるべきであり、実際には文字素の境界と形態素と境界が異なった位置に存在しているということになる(以下の(1)を参照せよ)。

(1) 文字素の境界と形態素の境界の不一致 (例: glagol^la 「語りつつ」)

文字素のレベル:	глагол-л (glagol- ^l a)	<l>と< ^l a>の間に境界
音素のレベル:	/glagol ^l -a/	/l/と/a/の間に境界
形態素のレベル:	{glagol ^l }+{a}	{glagol ^l }と{a}の間に境界

したがって、これらの動詞の本来の語尾は-aのみである。すなわち、口蓋化語幹の動詞から類推によって拡張されうる語尾は、^laではなく、むしろ-aであるということになる。この解釈の見直しにより、-aの由来を通常の種類推の結果として説明することができる。

しかしながら、この解釈に基づいた場合には、類推説の先行研究で通常の種類推の結果であるとされてきた^laという語尾の由来について、別個に説明を加えなければならない。

この^laの由来については、-aの直前に必ず口蓋化が存在することから起こった異分析の結果であると説明するのが最も妥当であるように思われる。すなわち、-aという本来の語尾に基づいた類推が起こった後に、-aだけでなく^l-もすべての口蓋化語幹の動詞に共通する要素であるという事実から、^laが語尾であるという異分析が起こる。そして、そのことによって^laをもとにした二度目の類推が起こったということになる。

したがって、本来は非口蓋化子音に終わる動詞の分詞語尾には語尾-yのみが存在していた。それに対して、まず第一に、口蓋化子音に終わる動詞の本来の分詞語尾である-aが類推によって拡張される。その後、異分析によって^laが口蓋化子音に終わる動詞の語尾であると再解釈される。そして、その^laが再び類推によって拡張される。類推説を前提にした際の三語尾の併存に至るまでの過程の説明としては、以上のような説明方法が最も妥当であると考えられる。以下の図1にこの過程の模式図を示す。

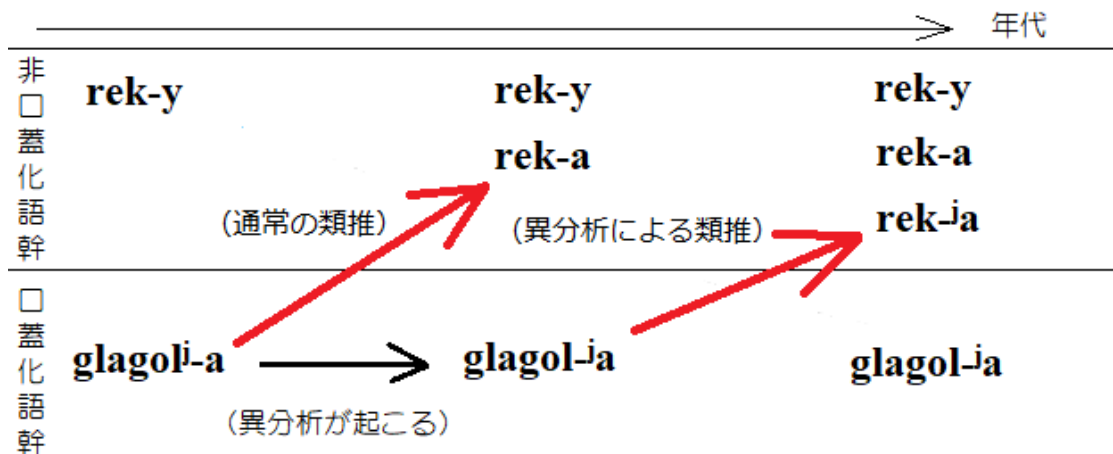


図1: 三語尾の併存に至るまでの過程 (例: rek- 「曰く」、glagol^l- 「語りつつ」)

6. まとめと今後の展望

以上の考察から、この事例は、類推説に基づいたうえで、スラヴ祖語から受け継がれた-yという語尾に、まず通常の種類推様式によって-aが加わり、次いで異分析によって生じた^laが加わったことによって

生じたものであるとするのが最も妥当性が高い説明方法であるといえる。すなわち、Gebauer (1909: 81–83) の類推説とは逆に、-a という語尾がまず第一に生じ、それよりも後に -ja という語尾が生じたと考えるほうが説明が容易であるということになる。

さらに、この事例においては、口蓋化語幹の分詞語尾というひとつの形態素から、通常の種類と異分析という二種類の形が生じており、かつその二種類の形と、-y という非口蓋化語幹の分詞の本来の語尾がすべて併存している。類推形、異分析形と継承形が共存することは歴史言語学上やや珍しい事例であるとともに、異分析の類型的理解にも資するものであると思われる。

また、今回分析したテキストと、Ferrel (1965: 13–17) および Ivanov (1983: 361) の記述に基づくと、それぞれの語尾が最も高い生産性をもっていた時期は、-y がスラヴ祖語時代、そして -ja が 12~13 世紀以降と推定される。-a の生産性が最も高かった時期はスラヴ祖語の崩壊以降で、現存する古ロシア語文献の書き記されるよりも前の時期であると思われるが、この語尾に関しては文献上の用例が他の二つの語尾と比べて不足しており、確かな判断を下すことは不可能である。

参考文献

- Avanesov, Ruben Ivanovič and Valerij Vasil'evič Ivanov (1982) *Istoričeskaja grammatika russkogo jazyka. Morfoložija. Glagol*. Moscow: Nauka.
- Buslaev, Fedor Ivanovič (1959) *Istoričeskaja grammatika russkogo jazyka*. Moscow: Gosudarstvennoe učebno-pedagogičeskoe izdatel'stvo ministerstva prosvěščenija RSFSR.
- Černyx, Pavel Jakovlevič (2011) *Istoričeskaja grammatika russkogo jazyka*. 4th edition. Moscow: Librokom.
- Durnovo, Nikolaj Nilolaevič (1924) *Očerki istorii russkogo jazyka*. Moscow-Leningrad: Gosudarstvennoe Izdatel'stvo.
- Durnovo, Nikolaj Nilolaevič (1969) *Vvedenie v istoriju russkogo jazyka*. Moscow: Nauka.
- Ferrel, James. (1965) A note on the history of the form of the Russian gerund in -a. *Wiener slavistisches Jahrbuch* 12: 13–17.
- Galinskaja, Elena Arkad'evna (2014) *Istoričeskaja grammatika russkogo jazyka: Fonetika. Morfoložija*. Moscow: Lenand.
- Gebauer, Jan (1909) *Historická mluvnice jazyka českého. Díl III: Tvarosloví. II: Časování*. Praha: Nakladatelství československé akademie věd.
- Gorškova, Klaudiva Vasil'evna and Georgij Aleksandrovič Xaburgaev (1997) *Istoričeskaja grammatika russkogo jazyka: učebnoe posobie*. Second edition. Moscow: Izdatel'stvo Moskovskogo Universiteta.
- Gorškova Viktor Ivanovič and Petr Savvič Kuznecov (1963) *Istoričeskaja grammatika russkogo jazyka*. Moscow: Izdatel'stvo akademii nauk SSSR.
- Ivanov, Valerij Vasil'evič (1983) *Istoričeskaja grammatika russkogo jazyka*. Second edition. Moscow: Prosvěšćenie.
- Jagić, Vatroslav (1893) Ein Zusatz. *Archiv für slavische philologie* 15: 520–524.
- Kiparsky, Valentin (1967) *Russische historische Grammatik*. Band 2. Heidelberg: Carl Winter.
- Kudrjavskij, Dmitrij Nikolaevič (1912) Drevne-russkija pričastija nastojaščago vremeni dejstvitel'nago zaloga na -a. *Russkij filologičeskij vestnik* 68(4): 389–397.
- Kuznecov, Petr Savvič (1953) *Istoričeskaja grammatika russkogo jazyka. Morfoložija*. Moscow: Izdatel'stvo Moskovskogo Universiteta.
- Lixačev, Dmitrii Sergeevič (ed.) (1997–2015) *Biblioteka literatury Drevnej Rusi*. 19 volumes. Saint Petersburg: Nauka.
- Matthews, William Kleesmann (1960) *Russian historical grammar*. London: University of London, Athlone Press.
- Miklosich, Franz (1876) *Vergleichende Grammatik der slavischen Sprachen III: Wortbildungslehre*. Vienna: W. Braumüller.
- Šaxmatov, Aleksej Aleksandrovič (1967) *Očerki drevnejšego perioda istorii russkogo jazyka*. The Hague: Europe Printing.
- Sobolevskij, Aleksej Ivanovič (1895) Zametki po slavjanskoj grammatike. *Žurnal Ministerstva narodnago prosvěščenija* 299: 84–93.
- van Wijk, Nicolaas (1924) Zur Entwicklung der partizipialen Nominativendung -onts in den slavischen Sprachen. *Zeitschrift für Slavische Philologie* 1(3/4): 279–286.
- Zubaty, Josef (1893) Zur Declination der sog. -jā- und -jo- Stämme im Slavischen. *Archiv für slavische philologie* 15: 493–519